

其の時代を尙勘考するに、中村氏系圖に如左記載せり。
元祖中村源兵衛

本國越前。仕于朝倉義景。後仕于越中佐々成政。
後仕于瑞龍公。賜百五十石。慶長十三年死。

土屋豊右衛門

仕于瑞龍公。天正十一年三月於江州柳ヶ瀬討死。

中村安右衛門

仕于瑞龍公。賜二百三十石。元和元年五月於攝
州大坂討死。

中村安右衛門

實弟初名吉兵衛

仕于微妙公。遺知加恩共賜三百八十石。

中村新丞

仕于松雲公。賜五百石。元祿二年死。

中村新兵衛

實品川左門二男。養子。

娘 新兵衛妻

按ずるに、彼の新丞が一人の娘といへるは、養子新兵衛の妻
なり。咄隨筆にも、中村新丞が彼の一人娘に品川左門子息
新兵衛を掣養子にして家相続す。今の中村兵左衛門、今村與
三兵衛、福嶋平太の妻女三人の母儀にて、三拾一歳にて病死
す。彼の六右衛門の娘が一期の年齢にやあらんか。六右衛門
が娘、たとへにするにはあらねども、昔多田滿仲の末子美丈
丸の身代りに、藤原の仲光が一子幸壽が首を切りしも、親の
心は同じかるべし。さて六右衛門が娘の母は、女心に夫の六
右衛門を恨み亂氣して、扱もくあの方なしが殺した。
かわいや娘などいうて、持佛堂へ詣で、は、しどろに花を
立て水を手向け、線香などもおびたしく立て、火の用心
も心元なき躰也。又六右衛門下宿すれば、娘殺の方なし
め、又來をつたかといひつゝ、近所の者までも見違へて
十方なしめといふ。それはいかにといへば、娘殺しが事也
というて、終に狂ひ死に死したりとぞ。清水六右衛門は後
彦右衛門と呼べり。後妻の子は清水加藏と云ふ。是も中村
兵左衛門に仕へたりと加藏母の物語也。と書載せたり。右
は卯辰妙見堂創立の濫觴來歴の徵證等の爲に、其の巨細を

記載して考證とするのみ。或は曰く、此の卯辰妙見は、む
かしは甚だ繁昌して信徒常に絶えず。然るに其の後絶々と
成り、参拜の人もなく、名のみなりしが、文政の初頃より
再び繁昌して、男女の信徒常に絶ゆる事なく、堂には提燈・
百成など奉納する事夥しく、實にめざましき事也。といへ
り。龜尾記にも、卯辰妙見は近年まで誰も知らざりしが、
三十年來大に流行し、今は引きも切らず。百なり・燈籠堂
中に満ち、實に金澤隨一の賑ひとなりぬ。又その利生もあ
らたなる事なり。所謂人の敬ふによりて威も増すなるべし
とぞ。

○金澤山妙應寺

法華宗也。貞享二年由來書に云ふ。當寺開基、天正十三年
金澤枯木町に於て僧日宗建立仕。寺屋敷枯木町にて千七百
五拾歩之地、從高德公拜領被仰付。然處大聖寺御陣之翌
年、御城下惣構堀御普請に付、爲御用被召上、替地修理谷
之上に而、野村五郎兵衛・前波加右衛門御奉行として、先
歩數拜領仕處、其後侍屋敷に罷成被召上、替地犀川中河原
に而、淺野將監・石川茂平爲御奉行、先歩數拜領仕候得共、

是又町屋敷に被仰付由に而、重而被召上、其以後替地不
被仰付。依之卯辰山請地に只今罷在。と記載す。按ずるに、
創立の寺地なる枯木町は、今町・尾張町の地邊にて、今枯木
橋あるは其の遺名也。其の後の寺地修理谷の上とあるもの
は、今の金澤神社の地邊なるべし。此の地に寺ありし故に、
山號を金澤山と稱せしもの也。さて其の次の寺地を中河原
とあるは、今の片町の地邊にて、三壺記にも中河原町とあ
り。むかしは片町・河南町を中河原町と稱したり。故に後
に河原町の名あり。古寺町もむかしは河原町と呼びたりし
なり。

○高道町

元祿九年の地子肝煎裁許附に、金屋町・高道町。と見れ、金
澤通町筋町割書に、一町三十五間高道町。とあり。此の町
は舊藩中は七ヶ所の内にて、半役の地なり。

○高道町來歴

高道町の地邊なる町筋は、昔は卯辰山の尾崎の末にて、小
高き荒地に道路を附け往來せしを以て、高道と呼べり。然
るを金澤市中追々取擴まりし頃、小高き荒地をば平均して